



「一分間だけ」

原田マハ（著）

宝島社文庫
467円（税別）

先輩経理ウーマンが
褒める
お気に入りの

この1冊

オススメ
Book

文庫本の表紙の帯に「泣いて泣いてぐしゃぐしゃになりました」という、女優の桐谷美玲さんの推薦文があったので興味を惹かれて購入した一冊です。で、読み始めて最初の2、3ページでもう涙腺が緩んでうるうるしてしまいました。物語では主人公の藍とゴールデン・レトリバーのリラ、そして藍の恋人（同居人）の浩介との出会いと別れが描かれています。プロローグは、死の淵にいるリラに会うために仕事場から自宅に駆け戻る藍の姿の描写から始まります。本書の1ページ目から2ページ目。「神様、どうかお願いです。1時間だけ時間をください…。そしたらあなたの子に、リラにいろんなことをしてあげられるのです…」「私たちはいつもの散歩道を一緒に歩いていく。あの子の鼻先は小さなものを見つめます。小石や名もない雑草、蟻んこ、ガム…この世で考え

られうるもつとも価値のないもの、それにあの子は夢になるんです…」。

最初にそんな藍の心の叫びが描かれ、プロローグが終わると、物語は一転して藍と浩介の穏やかな日常生活、リラとの出会い、藍とリラとの二人暮らしと物語はどんどん展開していきます。ファッション雑誌の編集者として仕事に追われていた藍は、世話のかかるリラを疎ましく思い始めます。そんな頃にリラが癌にかかれ、藍は仕事を犠牲にしてリラの看病に専念します。そしてリラの死。でも本書を読み終えてけて暗い気持ちにはなりません。むしろ大切なものはなかに気付き、成長する藍の姿に勇気をもらえたような気がします。ちなみにタイトルの本当の意味は本書の最終ページに書かれています。上質なラブストーリーを読み終えたような読後感の残る1冊です。

（トイプールの母）